

分の戦果を挙げていなかった。そのため、今後予定されていた、大陸打通の湘桂作戦を成功させるためには、長沙、衡陽を、そして西方四川省東境をうかがって、敵本拠地重慶に対し戦略上の脅威を与えるため、常德は重要な押えの必要な地点であった。

作戦は概ね順調であったと言えようが、常德では予想以上に敵の頑強な抵抗を受けた。中国軍としても、常德落ちれば「四川危うし」ということであるから、当然、激戦が続行するのは当然であつたらう。

また、第十一軍反転開始前後から、常德確保あるいは再占領すべしとの問題が起きたという。支那派遣軍総司令部、第十一軍間の不一致を来たし、統帥上の問題にまで発展しそうになったが、総軍・軍双方それぞれ努力により事なきを得たという。

総司令部は、常德・広徳両作戦において、第十一軍・第十三軍を指導しつつ、常德作戦実施について大本営の認可を待っていたところ、昭和十九年九月二十七日、左の命令が発令され、その実施を認可されたという。

大陸令第八百五十三号（九月二十七日）

一 支那派遣軍総司令部ハ現任務遂行ノ為中支那方面ニ於イテ一時作戦地域ヲ越エテ作戦ヲ実施スルコトヲ得。

二 細部ニ関シテハ參謀総長ヲシテ指示セシム。

（総長指示はこのとき特に発令されていない）
このような、最上層部であつたことなど、現地部隊長など知る余地もない。特に、末端の一戦部隊の下級將校以下知る由もなく、ただ、黙々と作戦準備をし、作戦に参加したのである。

中支常德作戦

城内突入の戦い

香川県 山地 豊重

私は昭和十七（一九四二）年七月、歩兵第二三四連隊第二機関銃中隊へ補充兵として入隊した。

当時、湖北省の長沙街道沿いの鯨部隊守備陣の最右

翼戦線にあつた白霓橋へ入隊したわれわれは、連隊初の補充兵としていろいろの話題を呼んだものであつた。

この年次の現役組の教育訓練が終わると、各中隊ともに同じ教育スタッフでもって、連続して補充兵組の教育訓練にかかった。なにしろ現役と異なつて、われわれは平均年齢二十九歳、肉体的にも大きな格差もあつて、それになにしろ最初の「補充兵」というものだけに連隊の注視を一身に浴びて扱かれたものだった。だが、後日ふりかえつて見て、この第一次補充兵が、連隊の主要戦力となつて奮闘したことは各隊指揮者層が衆目一致して推していることであつた。

実際に昭和十八年以降、連隊は休む間もない作戦の連続に明け暮れ、湖北の山野を出陣してから洞庭湖畔を戦い抜いたが、各中隊の第一線に立つて現役組と、いささかの劣等も感じないで全く互角に、そして血氣に先走りする現役よりも、思慮分別を身につけた行動をとつて戦場を駆けた第一次補充組が傑出していた。

その後、第二、第三の補充兵が入隊したが、同じ補

充兵でも第一次のそれとは格段に劣つていたことは事実であつた。

第一次補充兵は、体格でも現役兵より数等頑丈な兵たちが多かつたことをみても、また年齢的にみても三十歳前、男としてその当時、一番氣力も旺盛な人たちが多かつたのではあるまいか、と思つている。

教育中に、第二大隊は白霓橋から鉄道沿線の町、汀泗橋に移動した。大陸戦線出陣以来、守備地として三年間も親しんだ白霓橋を去るに、古參はひとしおの感慨にふけたことだろうが、まだ二月に満たぬわれわれ補充兵は教育と物品の梱包作業に追いまくられて移動した。このとき、私は大隊砲小隊長の古家秋夫中尉の馬当番となつた。初年兵での馬当番、中隊では抜き人事だというが、自分は郷里で馬に接していた商売だけに当然の氣持ちでやつた。

馬は私にとっては、商売、利害というものを離れて、ある意味では家族の一員でもあつた。したがつて、馬の世話をする、可愛がるということは当然で

あった。馬は利口な動物で、人を見るときは、この人には従順にしなければならぬ、一目おくと判断すれば言うことをよく聞く。従って扱う兵隊と馬との間には愛情も生じるわけである。そこに結果としては人馬一体の関係もできる。

話は変わるが、失敗話を一つ申しますと、部隊が移動行軍中、ある部落で宿営した日、夕食用に豚を一頭殺したところが、その地区が日本軍の占領してた自治会地域であった関係で、隊長からひどく叱られた。そして連隊会報にも出るという不名誉なことをしてかした。だが戦場二カ月の私には、自治会地区とか敵地区とか、そんな区別もできかねるし、さんざん叱責されたが馬耳東風、直立不動の姿勢で立っていた。

教育訓練が終わってからの私は、第二大隊本部勤務となった。どうも動作が大きいとか、いろいろな点で中隊要員には向かなかったのかも知れないが、本部では山本大隊副官の当番兵となった。

中国においては、対住民軍紀というのがやかましく言われていた。占領軍だから何をしてもよいなどとい

うことは許されなかった。戦後、日本軍は中国で住民に対して無法な行動をしていたなど言う人がいるが、そのようなことは堅く禁ぜられていたのだから、強く叱責されるのは当然であった。体験の少ない初年兵の私の認識が足りなかったわけであり、罰せられても仕方なかったのである。このような経験をしながら私は一人前の兵隊になっていったのである。

次に本題の常德殲滅作戦の体験について話をします。私たちの歩兵第二三四連隊は第六十八師団の隷下となり、連隊長名をとって戸田部隊とし配属したことを、当時、兵隊の私はよく知りませんでした。しかし、第二大隊山本副官の伝令をしていたので、他の兵隊よりは身近な立場であったので、大きな師団に伍して戸田部隊として行動していたことは分かったのです。

我が第二大隊、常德城東門を攻略

常德市というのは、湖南省の大きな湖である洞庭湖

の西端で、沅江の北にある都市であると上官に教わりました。そして、常德は「湖南総れば四川飢えず」と昔から言われている。湖南省の西部の軍事、政治、經濟の中心地であり、四川省にある重慶政府にとっては重要な都市であるとも聞きました。中国の状況がまだ分からなかった兵隊である私にも、何か重要な作戦となるのだなど、緊張をしていました。

我々の歩兵第二三四連隊は、槍兵団（第六十八師團）の配属部隊であつたので、先に申したとおり連隊長の名をとって戸田部隊と称されておりました。常德城は守りが堅く、我が軍は随分苦戦をしたようでした。我々の連隊は常德に面している川を渡り、東門攻略に向かった。私の第二大隊だけは、連隊の指揮下ではなく、峯兵団（独立混成第十七旅団）の指揮下で夜明け方、総攻撃しました。

しかし、常德に通ずる道路や堤防の上には多くの地雷が埋められていて、時々その爆発音が聞こえていたし、家屋の中にも敵がいて抵抗していました。

なにしろ、前夜来からやっていた第三師団の夜襲攻

撃も失敗、城内守備兵はそれこそ死にも狂いで反抗している真只中に我々の隊が飛び込んだのでありません。私たちは城壁にへばり付いたが、もう身動きができません。私たちは城壁にへばり付いたが、もう身動きができません。何しろ、手榴弾や機関銃の乱射を浴びている。しかも、辺り一面は前に申したとおり地雷が布設されているので走り抜けることもできません。その頃、第七中隊の石井小隊長の頭上へ迫撃砲弾が突きささるよう落ちて来た。

私は無我夢中で、いつの間にか敵のトーチカ陣地の横に寄り付いていたのでした。私は時間的に、腰の手榴弾を握ると銃眼目がけて一発投げつけました。トーチカ陣内ですごい炸裂音がして爆発しました。私は、薄暗く、煙のまだ消えないトーチカ陣内へ飛び込みました。警戒心とか何かもなく、反射神経がそうさせたのかもしれない。陣地内には敵兵が倒れている。それは死体でしたが、見ようとしても、まともに見られるものではありません。無残なものでした。

私は、死体の側にある、機関銃の長い弾薬を手ぐり寄せていました。重機関銃を四銃分捕るといふ戦果を

挙げたのがこの戦闘でした。

敵も味方も生死は瞬間、勝ち負けも瞬間の出来事です。生と死を分けるのは一瞬の差でした。これが戦争というものだと、私はつくづく感じたのです。まさに、殺さなければ自分が殺されてしまう、勝つか負けるかの差も一瞬なのだなぁと実感し、戦いの無残さを身をもって感じたのはこの時でした。

私は、まだ一等兵だった時に、この常德作戦という体験をしたのです。その後、城内へ突入してから、敵の迫撃砲の破片で左目下から肩にかけて負傷しましたが、入院せず、本隊のある藕池口へ帰還しました。右の胸には「戦傷記章」をつけたのですが、中隊を出て、本隊勤務となっていたためか、また階級は一等兵のままでした。

大隊副官の山本中尉は、私がよく気をつかって世話をして仕えただけに、人間的に、何かと心と心の交流が感じられた上官でした。

私は、作戦に出ると、馬の手入れだけは誰にも負けなかったと、現在でも自負しています。どんな強行軍

で、自分の体がどんなに疲労している時でも、青草が目に入れば採って馬に食べさせました。水があれば馬の脚を掃いてやったものです。それは、私が軍隊に入る前に馬を使って運送屋をしていたものだから……馬は私の商売道具を離れて、私自身の生命のようなものだったからです。人と人との関係に私と大隊副官とのつながり、人間と馬との関係もやはり同じような心のつながりがあったことを今でも思い出します。

初年兵の頃、古参兵はよくこんなことを言ったものです。「お前たち兵隊は一銭五厘（郵便葉書の値段）で集められるが、馬は一頭百何十円もするのだ」と、軍隊という所は、人の生命より馬の生命の方が一万倍以上もするのだということだ、「価値の高い馬を大切にしろ」と言うことを強調したのでしょう。しかし、そのようなお説教より、教育の仕方からすれば、馬と人間との愛情を強調した方が、より効果的ではなかったらうと、今でも考えることがあります。

次に作戦、戦闘について話をいたします。第二大隊が藕池口へ進出したときの敵の反撃はものすごいものでした。夜通し雷が光って雨中の敵兵の突撃を見たときは、これが人間同士の殺し合いかと、惨憺たる感情になったものです。私の一等兵としての戦場体験は、それは余りにも辛苦多難、苦しい思い出だけとなっています。

あの泥と沼地を、旧正月に歩き回った江北殲滅作戦、王勁哉將軍が白馬で逃げるのを一キロほど前で見ました。だが、それを追いかける任務を命ぜられた我が部隊でしたが、夜通しの強行軍で五体はへとへとに疲れきっていました。大隊砲観測班員全員が泥にまみれてばてたのだから、どれだけ苦しかったか。

苦しい行軍といえは、昭和二十年正月明けの、南部粵漢打通作戦中、一般中隊の戦闘要員として参加した私は、銃機関銃の弾薬を十三連（一連は五十発）を背負って歩いた時です。それに更に、携帯食糧の白米や餅、大豆など重量のある物ばかりでした。

この行軍が最高に骨身にこたえたことは事実でし

た。山奥での野宿、川を渡っての暗夜の隠密行軍、敵中横断四〇〇キロの潜行走破は、自分の足、体力と耐久力の問題ではなく、人間の意志、気力の尊さがいかに重要なのか、今に至るも感銘せずにはおられません。

これにより、私は精勳章は五本もらいましたが、第二選抜での上等兵となりました。

江西省の南昌に近い部落で空襲をさけて昼間休んでいるとき、負傷入院中の中隊長古家秋夫中尉が帰ってきました。この人の癖で、何やら口の中でブツブツ言っているが、その癖が終戦のことだとは全く考えてもいませんでした。隊長は、部下に終戦をはっきり発表することは、自分が終戦を認識することよりもっと辛かったので、口の中でブツブツ言っていたのかも知れません。

しかし、私たちにとっては、終戦・敗戦などということ、まさに青天の霹靂でありました。我々は、皆戦意も旺盛、私は戦場三年間の五体は頑健で、古参上等兵として、もう自分の生命感というものはなかつ

た。いつ死んでもよい、いつかは死ぬのだと覚悟を決めていたときだけに、日本の敗戦など聞かされても、戦後五十五年、頭の中で考えることすら不可能でした。今、思い出しても納得のいかぬ気持ちです。

二度の召集

長かった軍隊生活

愛知県 嶋田 勇

入隊前の家庭の状況は父母、長女、次女と、私（長男）、弟の六人家族でした。

家業は農業で米作で三反五畝の自家用米がやっとで、私は父の手伝いをやっていました。

昭和十二（一九三七）年春、徴兵検査で甲種合格となり、その年の十二月中旬、役場の兵事係に連れられ神戸の湊川神社に集合しました。ここには各市町村から一名ずつ若者が集められていました。

行先は、朝鮮平壤に駐屯の第二十師団歩兵第七十七

連隊（朝鮮第四十四部隊）第一大隊（半島出身の伯少佐）第一中隊で、初年兵受領の下士官が来ていました。神戸出港、釜山上陸、ニンニクの臭いが鼻につきました。汽車で北上、平壤に着き部隊に入りました。本隊は北支に出動中で留守隊で教育係しかおりません。軍曹が班長で伍長勤務上等兵と上等兵が初年兵の教育係でした。

初年兵は名古屋、岐阜その他全国からの寄せ集めて一期の六カ月間にわたる教育が始まりました。生まれて初めての北鮮は零下二十度の寒さがこたえました。

「兵隊と背のうは叩かなきゃ直らん」のたとえがあるそうで、何かにつけてビンタが飛んできました。古年兵が居なかったのが、せめてもの救いでした。

部隊の兵舎はれんが造りの二階建て内務班の窓側にペチカがあり、室内は暖かで春のごとくでしたが、内外の温度差が激しいので呼吸器を病む兵士が多く、凍傷は耳と指が多かったです。防寒被服は支給されましたが初年兵は、寒さに慣れるため着用は指示された時以外は許されませんでした。食事は高粱飯とカレー